

Ⅲ 肥後における古墳の調査 3

1. 鬼ノ釜古墳
2. 大道鬼の釜古墳
3. 境目古墳

本文目次

1. 鬼ノ釜古墳	1
2. 大道鬼の釜古墳	7
3. 境目古墳	10

挿図目次

第1図 鬼ノ釜古墳位置図	1
第2図 鬼ノ釜古墳墳丘測量図	1
第3図 鬼ノ釜古墳石室実測図	3
第4図 石棚を有する古墳分布図	4
第5図 刳抜玄門を有する古墳分布図	5
第6図 天草上島南岸における古墳分布図	7
第7図 大道鬼の釜古墳石室実測図	8
第8図 境目古墳近景	10
第9図 境目古墳石室実測図	11

図版目次

図版1

- 上 鬼ノ釜古墳遠景
- 中 鬼ノ釜古墳近景
- 下 鬼ノ釜古墳 刳抜玄門（石室内より）

図版2

- 上 鬼ノ釜古墳 石棚（玄門側より）
- 中 鬼ノ釜古墳 石棚（左側壁部分）
- 下 鬼ノ釜古墳 天井部のくりこみ（前壁側天井部）

例 言

○本編は1981・1998年に熊本大学考古学研究室がおこなった熊本県内における古墳の実測調査報告である。

○調査期間および調査参加者は以下の通りである。

大道鬼の釜古墳 [1981年7月]

古城史雄 松尾法博

境目古墳 [1981年8月]

古城史雄 松尾法博

鬼ノ釜古墳 [1998年3月1日～4日]

藏富士寛 大坪志子 若杉竜太 藤木聡 小路岳彦 石川まどか 鍛冶真理子 峯崎麻帆 村上浩明 山口大介

○大道鬼の釜・境目古墳に関しては熊本県教育委員会古城史雄氏、鬼ノ釜古墳に関しては福岡市教育委員会藏富士寛氏より、それぞれ玉稿をいただいた。

○本編の全体的な編集は藤江望・藤木聡でおこなった。なお、各章の内容は執筆者各人の見解によるもので、全体を通しての統一はおこなっていない。

1. 鬼ノ釜古墳（球磨郡免田町北吉井）

人吉盆地は熊本県南部を流れる球磨川の上流域に存在する長さ26km程の狭長な盆地であり、球磨川により南北に分断され、南岸には扇状地や段丘による台地、北岸には阿蘇溶結凝灰岩からなる丘陵が広がる。鬼ノ釜古墳は球磨川の南岸、人吉盆地のやや東よりに位置し、北側間近には球磨川の支流である井口川が流れる（第1図）。なお、当古墳の3.6km南西方向



遺跡環境

第1図 鬼ノ釜古墳位置図

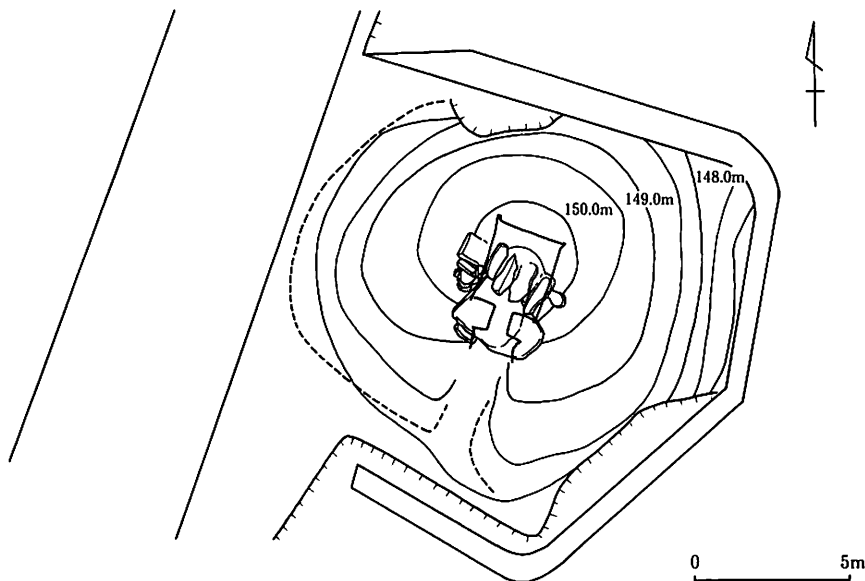
には鎔金獣帯鏡を出土したことで著名な才園古墳が存在する。

鬼ノ釜古墳は精巧な加工を施した凝灰岩を使用した横穴式石室を内部主体に有し、またその石室が石棚や剝抜玄門を持つなど非常に特徴あるもので、古くから注目されてきた古墳である（梅原1946）。しかし、古墳の概要は略測図が知られているのみであり（坂本1983）、古墳自体がもつ重要性が十分認識されているとはいいがたい状況であった。そこで、熊本大学文学部考古学研究室では現状における墳丘測量および石室実測調査を計画、1997年3月1～4日の計4日間にわたって調査を実施した。この調査にあたって免田町教育委員会教育長高橋眞氏、課長徳永正勝氏、犬童敦是氏を始めとする免田町教育委員会の方々、相良村教育委員会出合宏光氏には調査中さまざまなご配慮を戴いた。また熊本県教育委員会宮崎敬士氏には調査全般にわたり御世話になった。この度の調査が短期間に終了することができたのもひとえに以上の方々の御尽力のお陰である。記して感謝したい。

調査目的

鬼ノ釜古墳は現在、周囲に田畑の続く平地のただ中に位置し、墳丘周辺はコンクリート壁で整備され、至近に道路が走る。また周辺の耕作地と古墳裾部では1m程の比高差があるなど周辺地形の改変は著しい。墳丘裾部も当然その影響を考えなければならないが、現状を見る限りにおいては、墳丘は径13mの円形を呈し、その頂部には内部主体である横穴式石室の天井石が露出する（第2図）。

遺跡現状



第2図 鬼ノ釜古墳墳丘測量図（S=1/200）

玄室 内部主体は単室両袖型の横穴式石室であり、S-21° -W方向に開口する（第3図）。石室石材には凝灰岩切石を多用した精美な横穴式石室である。玄室は長さ2.5m、幅2.2mの略方形プランで、天井までの高さは現状で2.4mである。天井石は墳丘より露出し、横長の石材を石室主軸に沿って配列するという異質な状況を示している（第2図）。鬼ノ釜古墳では1976年の古墳整備時に石室天井部の補修がおこなわれており、この天井石はその際積み直されたものと考えられるが石室構造を見る限り、実際の石室の天井高もほぼ同様であったものと見て大過ないであろう。石室構築には大型の石材を用い、奥壁は3段、両側壁2段の石積により壁体を構成する。奥壁3段目の石材は内側に深いくりこみを入れ、湾曲し内側に大きく迫り出したもので、天井石の一部として機能している。玄門には厚さ0.8mほどの1枚石の中央をくり抜き、玄室入り口としたいわゆる刳抜玄門を有し、その上に一段、奥壁と同様の深いくりこみのある石材を積む。この石材は石室主軸上で長さ2m以上にも及ぶ巨大なものである。玄室入口は高さ0.9m、幅0.6mで、楣部分には凸状の加工がみとめられる。両側壁にはその高さが天井高の半ばを越える大型の腰石を配しており、左側壁が1.6m、右側壁が1.5mを測る。左側壁の腰石が平坦に仕上げられているのに対し、右側壁はくりこみが施されており、腰石の上端が内側に迫り出す形となる。しかし、前壁に向かうにつれてそのカーブはゆるやかになっており、刳抜玄門と接する部分ではほとんど直線的になり、玄門と側壁とが隙間なく合わさっている。この両側壁腰石に架け渡す形で、奥壁に沿って石棚が存在する。棚材は奥行40cm、高さ30cmの角柱状のもので、現在中央部で折れている。なお、この石棚の後面（奥壁に接する部分）は凹状のくりこみがみとめられるが（第3図石室平面図参照）、これが旧状を留めているのか、後世の手によるものかは不明である。

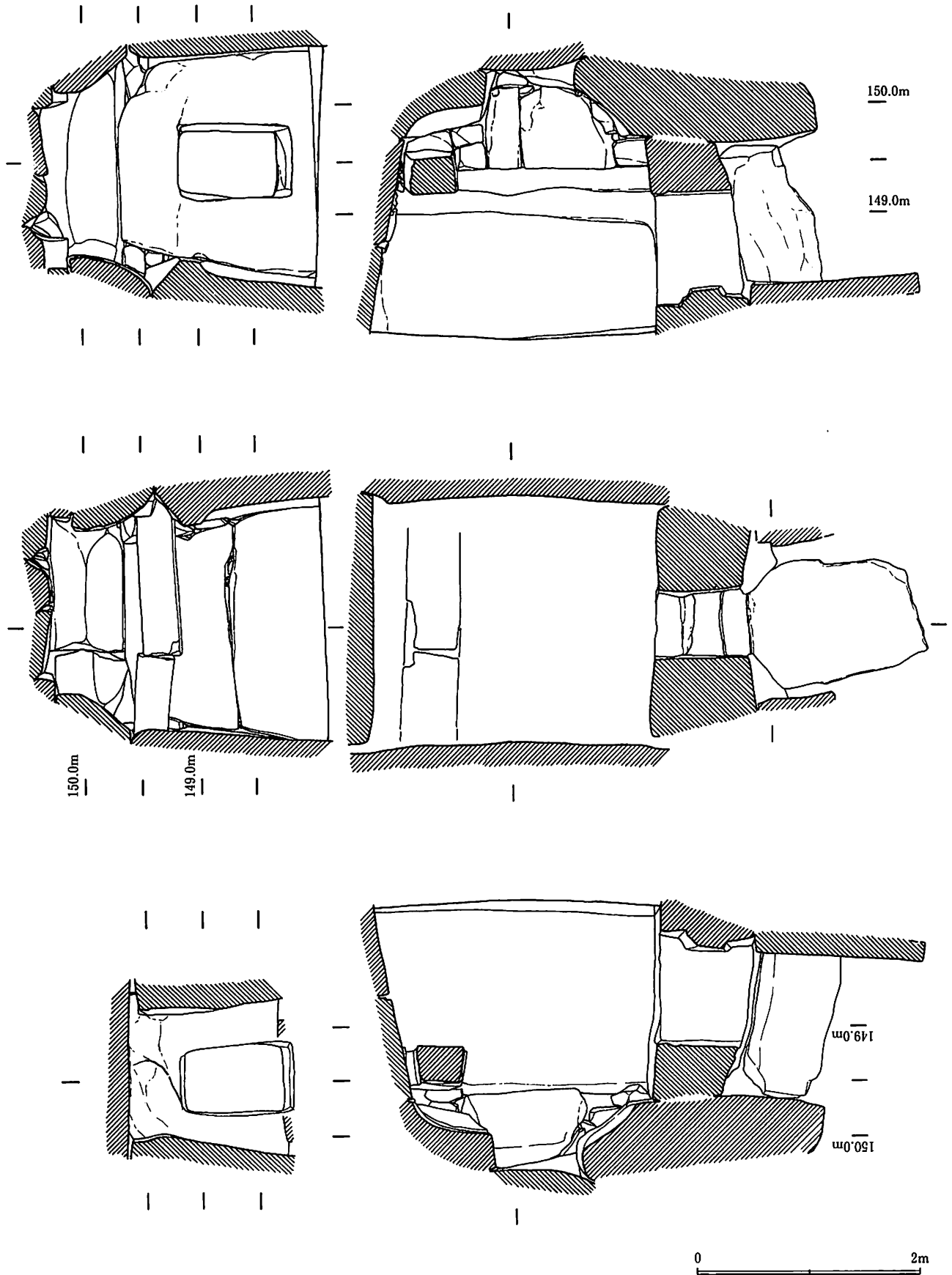
羨道部分 羨道部分は現在80cm程が残っており、これより先の構造は不明である。羨道両側壁は大型の板状石材1石のみで構成される。玄門部の先には大きな凝灰岩板石が横たわりますが、これは閉塞石である。長さ1.5m、幅1.2mで、厚さは15cmを測る。

石室の構築過程 ここでは現状の観察によりみることのできる範囲で、石室の構築過程に関して述べておきたい。奥壁2石目—側壁腰石—刳抜玄門—羨道側壁上端のレベルで横目地が通り、石室築造の一工程をこの部分にみることができる。さらに奥壁3石目—側壁腰石上の石材—玄門上石材を積み上げ、最後に天井石を架け渡すのであるが、右側壁が左側壁に比して10cmほど低いため、その低さを補うための工夫が随所になされている。石棚を架け渡した側壁上端の部分は石棚を架けるためのくりこみがほどこしてあるのだが（図版2）、腰石の高い左側壁上端のくりこみは深く、それに対し右側壁上端のくりこみはわずかである。また低さを補うために腰石・石棚上に小型の石材を各所に配している。それでも腰石の高さを反映して石棚はわずかに傾いており、これは石棚が途中で折れてしまった原因の一つにもあげることができよう。

鬼ノ釜古墳石室の特徴として、次の3つをあげることができる。

- 1) 石棚を有すること
- 2) 刳抜玄門を有すること
- 3) 天井部にくりこみを有すること

この3点について、熊本県内の事例を中心として次に簡単にまとめておきたい。



第3図 鬼ノ釜古墳石室実測図 (S=1/50)

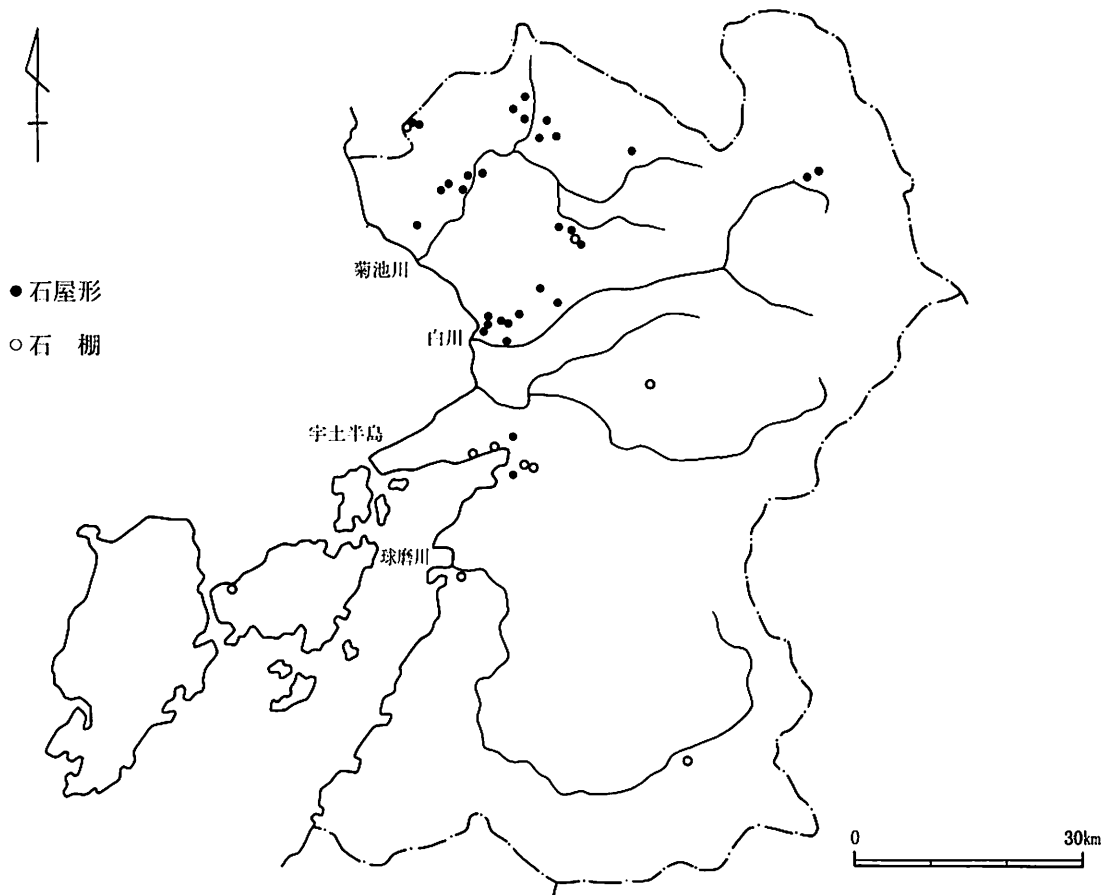
(1) 石棚について

鬼ノ釜古墳では石棚は奥壁側に存在し、両側壁に架け渡す形で設置される。石棚を有する古墳は、九州では管見で40数例程みとめられるが、熊本県下では10例の存在が確認されている(第4図)。その分布をみると宇土半島基部地域以南を中心とした熊本県中南部地域を中心として分布することがわかる。九州における石棚という施設の出現には石屋形との密接なつながりが指摘されているが(吉村1992)、熊本県下における石棚の分布と石屋形の分布をみると、相反する状況が看取できる。石屋形が顕著にみられる菊池川流域にはその支流域に一例が存在するに過ぎないのであり、石棚が単なる石屋形の省略形として存在するのではないことは明らかであるといえよう。このことは石棚の出現に関して、石屋形からの影響を否定するものではないが、熊本県下における石棚出現の要因も多角的に捉える必要性は指摘できる。

石棚の出現

石棚の設置方法

両側壁に架け渡すのみで奥壁に石棚を組み込ませない設置方法は、熊本県下では鬼ノ釜古墳一例のみである。九州全体を見渡しても、福岡県浮羽郡浮羽町の重定古墳や福岡県八女市童男山7・25号墳など少数例が存在するに過ぎない。この梁状に石棚を設置する方法には、時代が新しくなるにつれて進展する腰石の大型化とも密接に関連する。



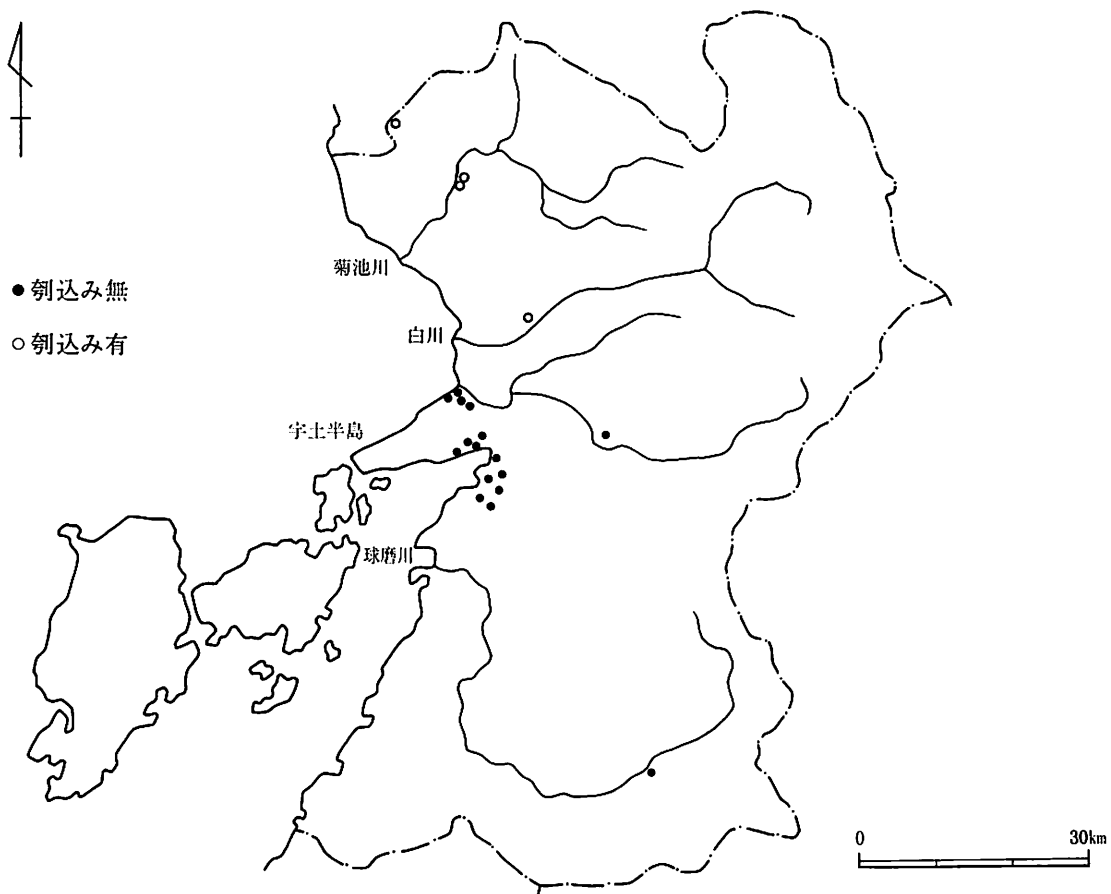
第4図 石棚を有する古墳分布図

(2) 刳抜玄門について

刳抜玄門とは板状石材の中央をくり抜き、石室入口としたもので、肥後地域にのみ存在する特異な玄門形態である。これは妻入横口式石棺(石棺式石室)の横口部に祖形を求めることができ、横穴式石室石材としての阿蘇溶結凝灰岩使用の本格化に伴い、横穴式石室にも採用された。この変化には横穴式石室築造に対する石棺工人の関与を指摘することができる。また、刳抜玄門は白川流域を境にして大きく南北2つの形態的特徴を指摘することができる。それは閉塞石を受けるためのくりこみの有無で、このくりこみは肥後北部地域にのみ存在し、数量的には多くの刳抜玄門を有する古墳が存在するにもかかわらず、肥後南部にはくりこみを有するものが一例も存在しない(藏富士1997)(第5図)。

刳抜玄門の
地域性

鬼ノ釜古墳の刳抜玄門も前述したように、楣部分には加工の痕跡をみることができるが、閉塞受けのくりこみは存在しない。これは肥後南部地域とのつながりを示すものであり、特に宇土半島基部周辺地域では数多くの刳抜玄門が造られていることから、同地域よりの影響を想定することができる。また、このことは球磨盆地にみられる他の横穴式石室のあり方からも指摘できる。球磨郡多良木町に所在する赤坂古墳は胴部の張りの強い、円形に近い玄室プランを有する特異な横穴式石室であるが、その玄門部には把手の陽刻された閉塞石が残存している(坂本1983)。これと同様の閉塞石を有するのが宇土半島基部地域に所在する国越古墳(宇土郡不知火町)であり、このような横穴式石室の存在からも、球磨盆地と宇土半島基部地域との密接なつながりを指摘することができる。



第5図 刳抜玄門を有する古墳分布図

(3) 天井部のくりこみについて

鬼ノ釜古墳の奥壁・前壁側天井部の石材は深いくりこみが施してあり、半球形の天井に対する指向が働いていたことは確かであろう。右側壁腰石にみられるくりこみも同様な意図による結果かもしれない。このような玄室天上部にくりこみのある横穴式石室は、熊本県下では玉名郡菊水町江田穴観音古墳、上益城郡嘉島町井寺古墳、下益城郡松島町宇賀岳古墳がある。江田穴観音古墳には鬼ノ釜古墳と同様刳抜玄門をもち、凝灰岩切石によって造られた精美な横穴式石室を主体部にもつ。井寺古墳主体部は熊本県下で凝灰岩切石が石室全体に多用された最初の横穴式石室であり、切石を見事に組み合わせてドーム天井を築き上げている。宇賀岳古墳は天上石が屋根形を呈するという特異な形態を有し、出雲地域における石棺式石室の祖形とも目されている(小田1980)。このように見事な凝灰岩加工技術がふんだんに認められる横穴式石室に天井部の刳り込みが認められるのであり、宇賀岳古墳例では、その形態から石棺にみられる蓋石のくりこみからの影響を指摘することができる。このような横穴式石室天井部のくりこみにも石棺にみられたくりこみと同様の技術的・思想的系譜をたどることができるのかもしれない。

年代

最後に鬼ノ釜古墳の築造時期について述べておきたい。大型化した腰石や古墳時代終末の石槨墳を思わせるような石室構造から類例を求めると、やや地域的には異なるが前述した江田穴観音古墳を挙げることができよう。江田穴観音古墳からはTK209～TK217型併行期に位置付けることのできる馬具が出土しており、年代的には7世紀初頭～前葉に比定されている(角田1996)。この時期比定は石室構造上も矛盾するものではなく、江田穴観音古墳の築造時期も同様の時期と考えることができよう。現在伝えられている鬼ノ釜古墳出土の遺物も年代にこれと矛盾するものではなく、ここでは鬼ノ釜古墳の築造時期を7世紀初頭～前葉に考えておきたい。

(藏富士)

(引用・参考文献)

梅原末治「肥後の二古墳—豊田村石の室と免田町の鬼の釜古墳」『史跡と美術』169 1946年。

小田富士雄「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座4 朝鮮と倭国』学生社1980年。

角田徳幸「江田穴観音出土の杏葉について」『肥後考古』第9号 肥後考古学会 1996年。

藏富士寛「刳抜玄門について」『椿原古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書 第20集 1997年。

坂本経堯「肥後上代文化資料集成」 1983年。

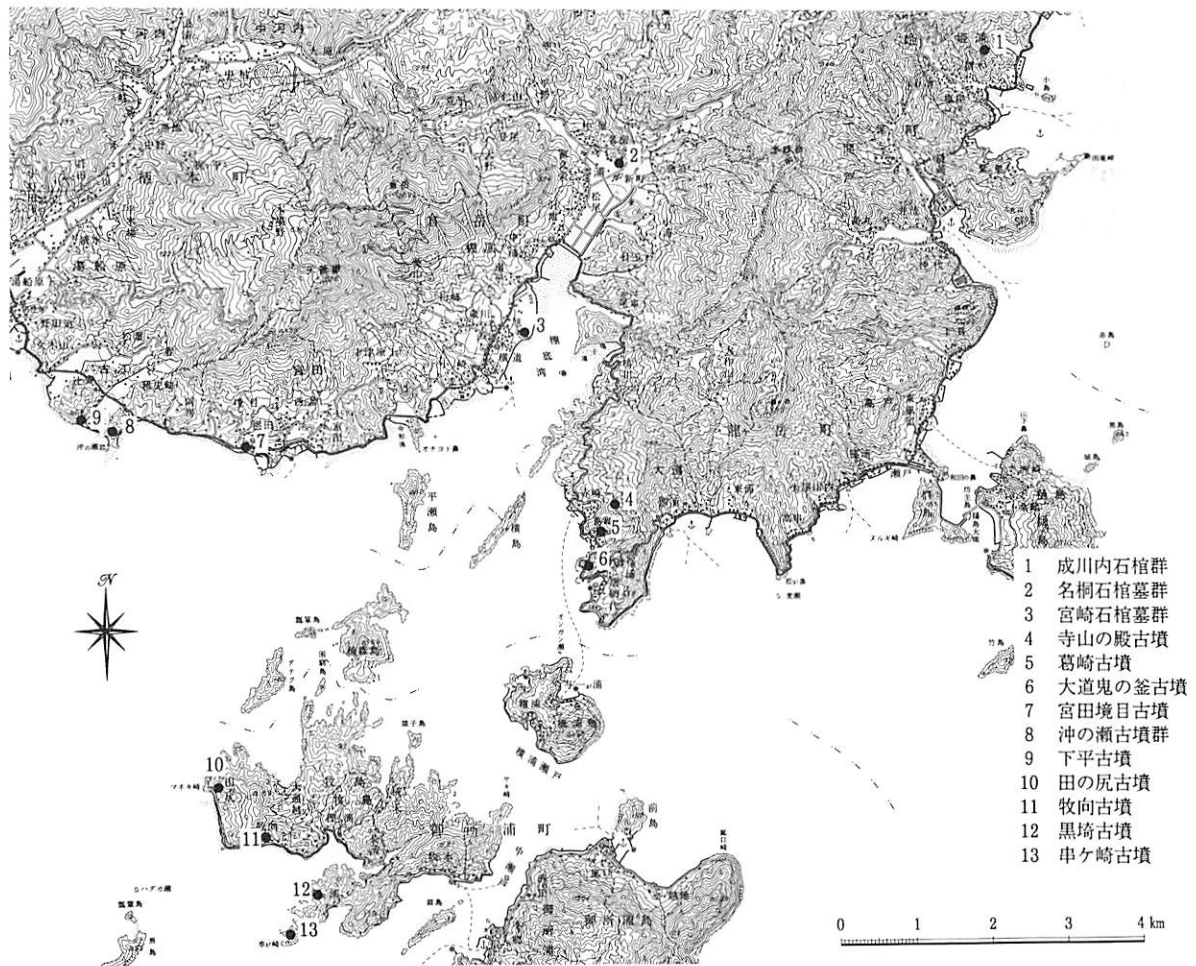
吉村靖徳「九州における横穴式石室の石槨について」『九州歴史資料館研究論集』17 1992年。

2. 大道鬼の釜古墳（天草郡龍ヶ岳町大道名剪）

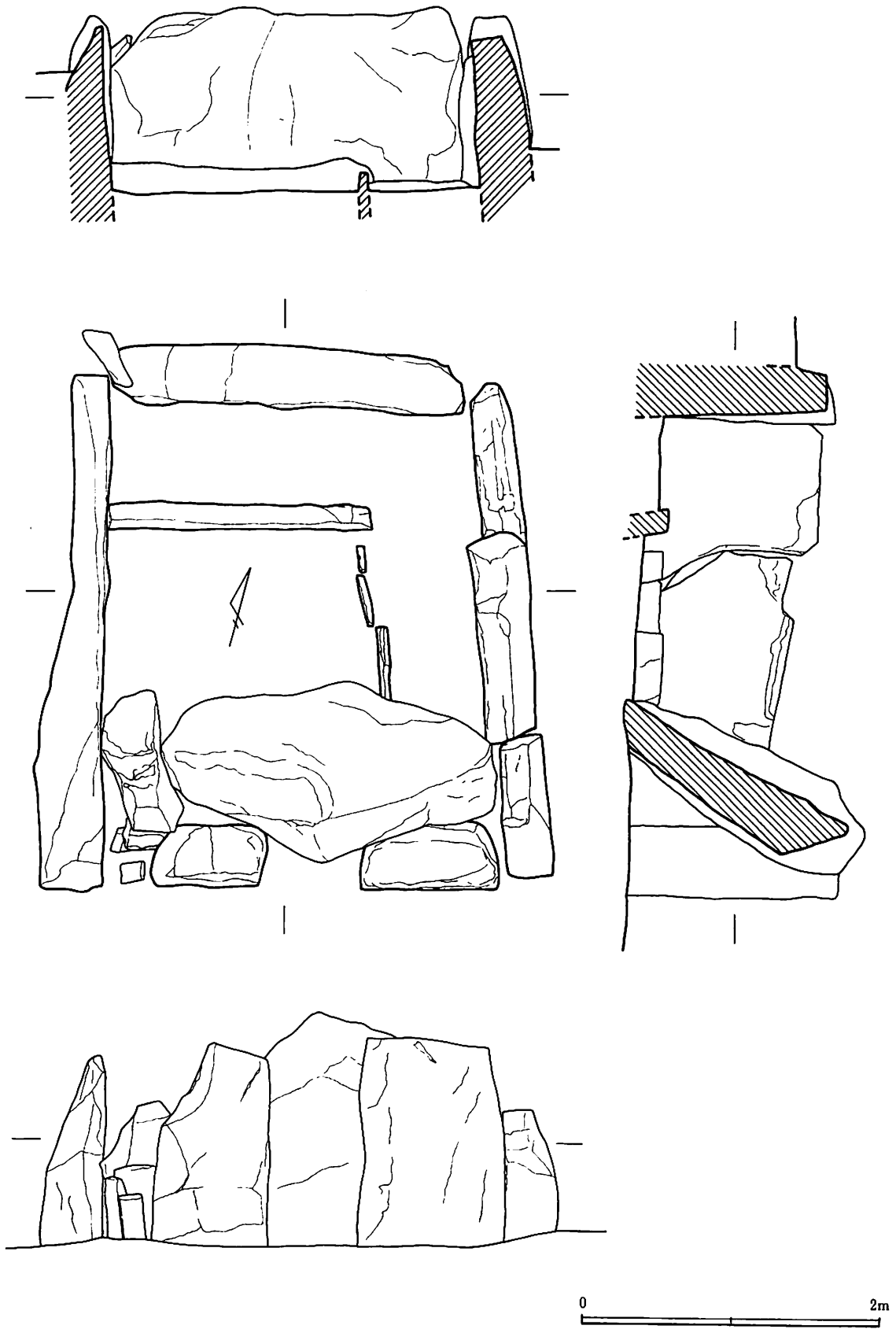
大道鬼の釜古墳は、海拔標高470mの龍ヶ岳から南西にのびる丘陵の端部に位置し、入江に面している。またこの古墳の西方数百mの葛崎の尾根には、金環・銀環・管玉・小玉・勾玉などが出土したという葛崎古墳が存在していたが、既に消滅している（第6図）。『竜ヶ岳町制施行20周年記念町勢要覧』によると「古墳の石材は波止場の石に使用し、遺物はあたりを恐れ埋め戻した。」ということである。

大道鬼の釜古墳は、南に開口する横穴式石室で、封土を失い、石室下部の腰石及び袖石のみが残存しているが、周囲には天井石等の石材は見られない。また墳丘の南側は、国道266号線により一部削平されている。以上のような状況であるため古墳の形状及び規模は不明であるが、古墳の形状は、円墳であると推定される。

玄室は、長さ約2.9m、幅約2.4mで、玄室平面形は正方形に近いプランを呈す（第7図）。奥壁及び左右両側壁は、それぞれ大型の石材1石を据え、腰石としている。右壁の巨石は現在3つに割れているが、本来は1石である。奥壁及び右壁の巨石の石材は砂岩であるが、左側の巨石は、1～3cmの石英粒を含むもので、石英粗面岩かと思われるが確かではない。またこの左側の巨石は上端面の幅が狭く、とてもこの腰石上面から石材を積むことは出来ず、恐らく腰石の背後より積み上げるものであろう（第7図）。



第6図 天草上島南岸における古墳分布図



第7図 大道鬼の釜古墳石室実測図 (S=1/40)

床面については、確認していないが、それほどの土砂等の堆積はないものと思われる。仕切石がL字状に残存しているが、本来コの字形の屍床配置を採るものであろう。奥壁側の仕切石は、現状で長さ約170cm、幅約15cm、高さ約15cmである。右壁側の仕切石は、三つに割れているが、本来は1石で、長さ100cm、幅6cm、高さ15cm程度の大きさである。羨道部は完全に破壊され、両袖石の上に架していたと思われる天井石は玄室内に陥落し、袖石に倒れかかっている。『天草の古代』⁽¹⁾によると「羨門部には、敷石を敷き固め…」と記載されているが、確認出来ない。また袖石から南側に約3m離れた地点に巨石が1石だけ立っている。この石材が石室に関係するものかどうか不明である⁽²⁾。

現地での聞き取り調査によると、以前に土器・刀が出土したとのことであるが、詳細は不明である。
(古城)

註(1) 坂本経堯・経昌『天草の古代』 1971年。

(2) この石材については『天草の古代』には、「羨門外柳の残石であろうか。そうするならば石室の長さは七米にも及び、非常に壮大な石室となる。」と記載されている。もしこの石材が原位置であるなら、天草地方唯一の複室墳の可能性も出てくるが、昭和56年当時のメモには「根拠はないが原位置ではないのではないか」と記載している。また平成10年に再度現地に出向いたが、袖石より南側3mの地点は段落ちとなっており、巨石と呼べるような石材も見当たらなくなっていた。しいて探せば厚さ約30cm、高さ50cm前後の石があるくらいであった。

位置 3. 境目古墳（天草郡倉岳町宮田字境目）

境目古墳（第8図）は倉岳の中腹にそびえる矢筈岳（海拔標高626m）から南にのびる丘陵の端部に位置する。現在は古墳のすぐ北側を国道266号線が通り、その他3方は水田となっているが、この水田は近世以降の干拓であり、本来は海に隣接していたと思われる。封土は既に存在せず巨石が露出しており、石室の背後には祠が祭ってある。

現状 大正14年刊行の『天草案内』⁽¹⁾によれば、「県敷道に當り石櫛ありしを今の場所に移轉修築した。」との記載がある。その一方で昭和46年刊行の『天草の古代』⁽²⁾によると、移轉復元の記載は一切見えず、「径約二五米、高さ約四、五米、巾約六米の濠をめぐらした大きな円墳に復原できる。」との記載がある。また昭和56年当時の現地での聞き取り調査によると「この古墳とは別にもう一基あったが、県道工事の際に破壊された。」とのことであった。また『天草の古代』に記載されている周濠については確認できなかった。

以上のような状況であり、この古墳が果たして現位置にあったかどうか不明である。仮に移転していたものであったとしても、残存する腰石の配置状況は築造当時のものと大差はないと思われる。

玄室 現状では、南に開口する単室の横穴式石室であり、玄室は長さ約2m、幅2～2.1mでほぼ正方形のプランを呈す。奥壁及び左右両側壁は、それぞれ大型の石材1石を据え、腰石としている。石材はいずれも砂岩である。左壁では、腰石の上に2～3段の石積が残存する。奥腰石の上にも、天井石として使用されていたと思われるような石材が直接乗せられているが、不自然であり腰石より上位のブロック状の石の積み方は後世のものであると思われる。また奥腰石の背後には、恐らく古墳に使用されていたであろうと思われるブロック状の石を石垣状に積み上げている。玄室内にも奥壁に沿って巨石が置かれているが、いずれも後世のものである。

羨道 羨道部も下部の巨石のみの残存である。現状で袖石からの長さ約1.4m、幅約0.9mである。やはり現地での聞き取り調査で大正6・7年頃に高塚が出土したというが、詳細は不明である。

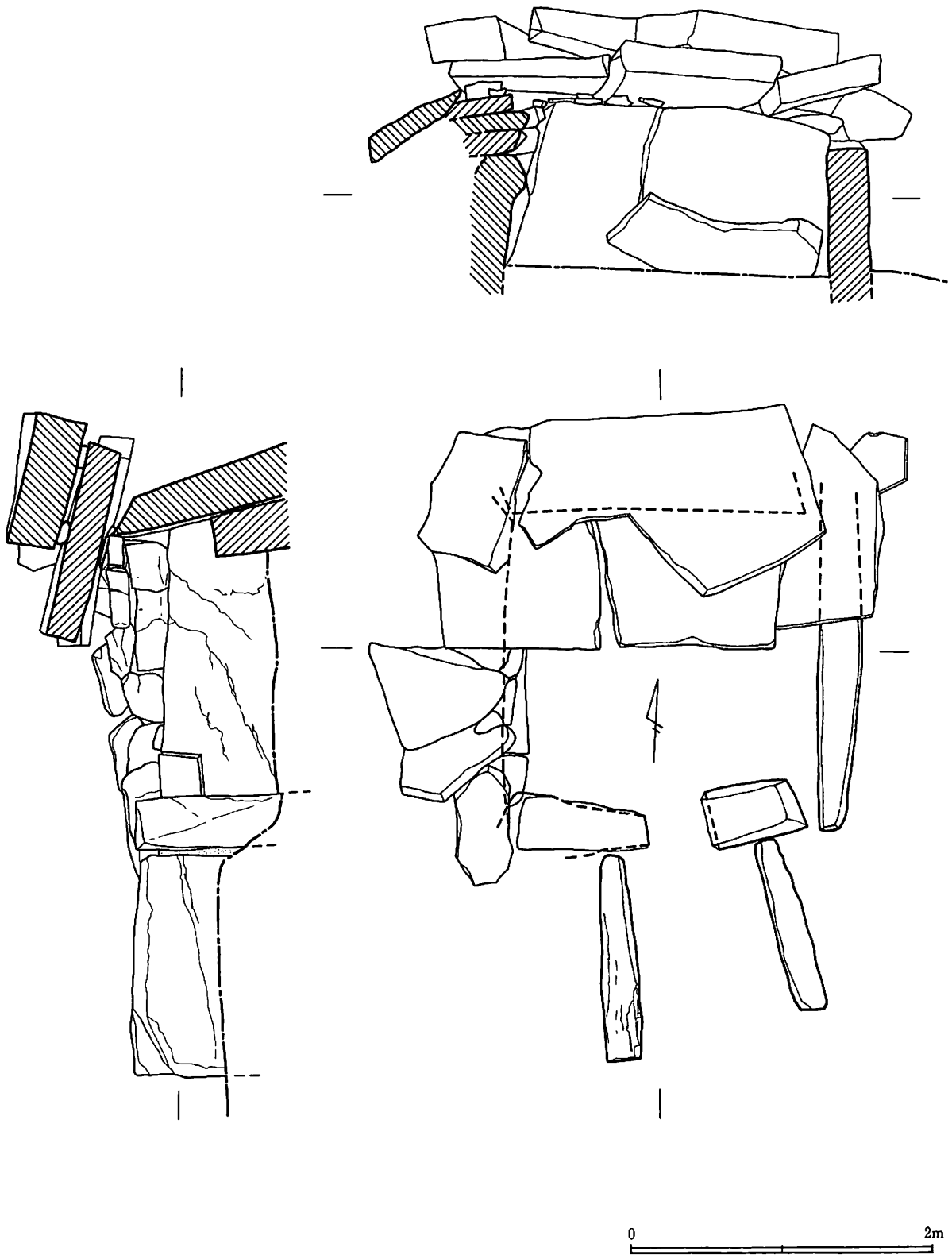
（古城）

註（1）うしお会『天草案内』 1924年。

（2）坂本経堯・経昌『天草の古代』 1971年。



第8図 境目古墳近景



第9図 境目古墳石室実測図 (S=1/40)